令和６年度自己評価計画書（最終評価）

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度以降の取り組み（改善策など）
1 不断の授業改善により、生徒の主体的･対話的な学びを推進し、専門職にふさわしい実践力を身につけ、国家試験全員合格を継続する。	① 事例検討、発表、考察などの「主体的・対話的な学び」を取り入れることにより、思考力・判断力・表現力の向上を図る。	「授業は知識・技術、新しい見方・考え方が身に付き、自分の力になっている」 と評価した生徒の割合が Ａ　８５％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７５％以上 Ｄ　７５％未満　である。	授業は知識・技術、新しい見方、考え方が身に付き、自分の力になっていると評価した生徒の割合 １年生　９４．８％ ２年生　９３．４％ ３年生　８８．９％ 専攻科　８８．５％ 全　校　９０．２％ 評価　Ａ	全校の肯定評価は今年度の中間評価より 0.9%増加した。実社会との関連を示し、生徒の興味関心を高める工夫をしている。１・２年生では、生徒の理解度を見取り、達成感を感じさせ、学習意欲を持たせる。３年生・専攻科生では、学習内容が深化することによる壁に戸惑う生徒がいる。既習事項との関連性を示し、多面的･多角的な視点からの思考を促し、達成感を味わうことによって、自ら学ぼうとする姿勢を育成する。
	② 協働学習や疑問点を自ら解決する場面を通して、主体的な学習態度を育成する。	「分からないことは質問したり、調べたりして理解するようにしている」 と自己評価した生徒の割合が Ａ　８５％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７５％以上 Ｄ　７５％未満　である。	分からないことは質問したり、調べたりして理解するようにしていると自己評価した生徒の割合 １年生　９６．８％ ２年生　９２．８％ ３年生　９１．４％ 専攻科　９７．０％ 全　校　９３．９％ 評価　Ａ	全校の肯定評価は今年度の中間評価より 1.1%増加した。生徒同士で課題について話し合ったり、教え合ったりすることで学習内容の定着を図っている。教員が提示した課題に取り組むことができる生徒は多い。しかし、自らが解決すべき課題を意識して、主体的に取り組むことができる生徒は多くない。自分が既に獲得している知識から推測したり、知識を新たな状況に応用する課題を提示し、生徒の主体的な思考を促し、生涯にわたり学び続けることができる力を育成する。
	③ 専門教科の知識・技術の確実な定着を図るため、目標レベルに達するまで補習・個別指導を実施する。	〈高校生〉 偏差値４０未満の生徒が Ａ　０人 Ｂ　１～２人 Ｃ　３～４人 Ｄ　５人以上 である。	１年生： ４０未満　１名 評価　Ｂ	＜高校生＞ １年生：５年一貫校模試（２月）の結果、総合偏差値 66.1、科目別偏差値では、基礎医学（人体の構造と機能）56.7、基礎看護 63.1、各科目で偏差値 40 未満者は１名（基礎医学）であった。 ２年生：５年一貫校模試（２月）の結果、総合偏差値 53.2、

				２年生： ４０未満　２名 評価　B ３年生： ４０未満　５名 評価　D	科目別偏差値では、基礎医学（人体の構造と機能）53.2、基礎看護 52.4、偏差値 40 未満者は２名（基礎医学）であった。 ３年生：全国看護模試(２月)の結果、総合偏差値 55.2、偏差値 40 未満者は５名であった。基礎的知識を確実に定着させるため課題学習への取り組みの強化と個別指導による学習支援を行う。
			〈専攻科１年生〉 偏差値４２未満の生徒が A　０人 B　１人 C　２人 D　３人以上である。	〈専攻科１年生〉 偏差値４２未満の 生徒　０人 評価　A	〈専攻科１年生〉 １２月の第２回基礎力全国模試の結果、全国偏差値４２未満の生徒は０人であった。第１回以降は、問題を解きながら丁寧な調べ学習を徹底した。学校偏差値は第１回 55.1 から 57 に上がり、第１回で偏差値 41.1 であった生徒は 51 まであがった。今後も全員合格を目標に小テストや個別指導を継続し、全体の学習意欲を高めて行く。
			〈専攻科２年生〉 偏差値４２未満の生徒が A　０人 B　１人 C　２人 D　３人以上である。	〈専攻科２年生〉 偏差値４２未満の 生徒　２人 評価　C	〈専攻科２年生〉 全国看護模試（１２月下旬）の結果、学校偏差値 56.9、偏差値 42 未満は２名であった。知識定着に向けた全体補習と個別指導を強化する。グループ学習（学び合い）も継続しクラスのモチベーションも高めていく。 第１１４回看護師国家試験に全員合格した。
		④ ＜１年生＞ 合格を目指して学習する習慣が身につくように、SH 時に行われる漢字テスト、英単語テストに合格できるように指導する。	＜１年生＞ 小テストに８０％以上合格している生徒の割合が A　１００％ B　　９０％以上 C　　８０％以上 D　　８０％未満	＜１年生＞ 小テストに８０％以上合格している生徒の割合 １名　　９．１％ 評価　D	＜１年生＞ 中間評価以降小テストを８回（漢字テスト４回・英単語テスト４回）実施した。生徒一人あたり７回合格することが目標である。この目標を達成した生徒は一人である。知識の定着に向けた、計画→実施→振り返り→継続の学習方法を実践し、学習に粘り強く取り組む姿勢を育む支援を行う。

		＜２年生＞ 国家試験合格に必要な基礎力を身につけるために、毎週介護福祉検定２級レベルの小テストを実施する。	＜２年生＞ 小テストに８０％以上合格している生徒の割合が Ａ　１００％ Ｂ　　９０％以上 Ｃ　　８０％以上 Ｄ　　８０％未満	＜２年生＞ 小テストに８０％以上合格している生徒の割合が ６２．５％ 評価　Ｄ	＜２年生＞ １・２学期で計１５回の小テストを実施した。８０％以上（１２回以上）合格した生徒の割合は６２．５％（１０人）であった。小テストの結果に対し個別に課題を増やしたことにより合格者が増加したが、全員合格にまでは至らなかった。今後、第１回模擬演習まで、既習内容の定着を確認する小テストを実施していく。小テストや課題実施の意味を理解し、学習習慣が身につくように指導する。
			介護福祉検定２級に合格した生徒の割合が Ａ　１００％ Ｂ　　９０％以上 Ｃ　　８０％以上 Ｄ　　８０％未満	介護福祉検定２級に合格した生徒の割合が ４３．８％ 評価　Ｄ	福祉検定２級に合格した生徒の割合は、４３．８％（７人）であった。小テストを実施したが、点数が低い層に対して、どの程度知識が定着しているかの確認が不十分であった。知識定着のための出題の工夫と、結果を踏まえた個別対応を実施する必要がある。
		＜３年生＞ 介護福祉士国家試験全員合格に向けて、小テストや個別指導を行う。	＜３年生＞ 国家試験演習等で個人得点率が６５％未満の生徒が Ａ　０人 Ｂ　１人 Ｃ　２人 Ｄ　３人以上　である。	＜３年生＞ １２月実施の国家試験演習で個人得点率が６５％未満の生徒 ０名 評価　Ａ	＜３年生＞ 日々の小テストや授業内での知識定着の確認、小グループを活用した学習支援等を行い、個人得点率の伸びは認められる。しかし、得点が不安定な生徒もみられ、安定して得点が得られるように知識の定着に向けた指導を行う。また、目標得点率を徐々に上げていく事で、生徒のモチベーションの継続に繋げていく。 第３７回介護福祉士国家試験に全員合格した。

学校関係者評価委員会の評価	学年があがるにつれ偏差値は上がるが、自己肯定感、学習深化への戸惑いが気になる。漢字テスト、英単語テスト等の基礎的学習は非常に重要であり、必要性を理解させながら達成感を持たせる関わりをしてほしい。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	自己肯定感、戸惑いは、実習等の経験で患者・利用者の視点に立つことができるようになった成長の証。達成感を持たせる関わりを行っていく。また、学校全体で取り組んでいる基礎的学習の指導も継続していく。

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度以降の取り組み（改善策など）
2 生徒会活動・部活動、ボランティア活動などを活性化させ、心身の健康とレジリエンス涵養を図り、活気ある学校づくりを推進する。	① 体育祭や球技大会などの生徒会活動を縦割り班で実施することで、生徒同士の交流を図り、活気ある学校作りを推進する。	縦割り班活動を通じて、他者と協働して困難を乗り越える力がついたと答える割合が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満　である。	縦割り班活動を通じて、他者と協働して困難を乗り越える力がついたと答える割合が ８０．７％ 評価　Ａ	ボランティア活動やスポーツフェスで、他学科、他学年と共に活動することができた。1、2年生が分からないことを3年生に聞いたり、同学年で協働して縦割り活動をすることができた。一方で、縦割りでは、学年間で時間を合わせる必要があるため、集まって活動する時間の捻出が難しく、早めに計画をたてて活動することが課題である。
	② 生徒のセルフケア促進に向けて、生活習慣、発達段階、災害フェーズを踏まえた活動を実施する。	活動が自分の今後の学校生活に活かされると回答した割合が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満　である。	活動が自分の今後の学校生活に活かされると回答した割合が ９８．１％ 評価　Ａ	取組として、スクールカウンセラーの先生による３講演会と保健課による性教育に関する１講演会、心の健康に関する発表と保健だよりの作成を実施した。それぞれの取り組み後のアンケートから「今後の学校生活に活かされる」と回答した生徒が９８．１％であり、取り組みが生徒のセルフケア促進に繋がったようである。取り組みから、生徒に提供する多くの情報は、こちらが考えている以上の気づきや学びに繋がっているため、今後も機会を捉えて多面的に発信していく必要がある。また、こちらからだけではなく、生徒自身がそれぞれの課題について主体的に関心をもち活動、発信していく姿もみられたため、セルフケアへの意識向上に向けた支援の継続が必要である。

	③	「田鶴浜高校いじめ防止基本方針」に基づいて、いじめのない学校作りを推進する。	生徒アンケートで「互いの人格を尊重し、いじめを絶対に許さないという意識」について、「大いに高まった」と「高まった」の回答が Ａ　９５％以上 Ｂ　８５％以上 Ｃ　７５％以上 Ｄ　７５％未満　である。	９月の生徒アンケートで「いじめを許さないという意識」が「大いに高まった」と「高まった」の回答が ９７．２％ 評価　Ａ	「いじめを許さないという意識」が「大いに高まった」と「高まった」という回答の割合が昨年度より０．５ポイント下がったが「大いに高まった」については６７．３％あり１１．４ポイント上がっている。「この意識を高めるきっかけとなったのは講演会」という回答が最も多く、外部講師の講演がいじめを再認識する機会となり「許さない」の意識を高める効果があると思われた。看護科、福祉科の授業を通して他者を思いやる気持ちを考える時間もあり、いじめを許さない意識が高い位置で継続されている。今後も相談課と連携を取りいじめの未然防止に努める。

学校関係者評価委員会の評価	ボランティア活動は自己有用感が高まる。他者との関わりの構築ができ、得られるものも多い。 心に残る体験を今後も継続してほしい。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	今年度能登地区で実施した災害ボランティアで、自己有用感と共に生徒自身のレジリエンスも高まった。 今後も社会との関わりを持たせる機会を作っていく。

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度以降の取り組み（改善策など）
3 本校の特色ある教育活動や、地域の医療・福祉を支える人材の必要性等の広報に工夫を重ね、志願者の増加を図る。	① 体験入学、学校説明会等の各種説明会の内容を充実させるとともに、中学生・保護者の参加人数の増加を図り、本校の教育活動とその成果の広報を強化する。	参加者数が、昨年度より A　上回った。 B　同程度だった。 C　下回った。 D　大きく下回った。	学校説明会（７月）＋ 地区説明会（11 月） 昨年度より ３０名程度減少 評価　D 体験入学（８月）＋ オープンキャンパス(12 月) 昨年度より ４０名程度増加 評価　A	学校説明会・地区説明会への参加者は昨年度と比較し３０名程度減少した。説明会開催の中学生・保護者への情報発信の媒体を検討し周知を図る。今年度より新たに中学１・２年生を対象にオープンキャンパスを実施したこともあり、体験入学・オープンキャンパスへの参加者は４０名程度増加した。中学生等の看護・福祉に対する興味関心を喚起するために、体験型の内容を企画し、早期から進路選択に資する情報提供をしていく。 小学校での出前授業９校（内本校生徒との交流授業４校）、中学校での出前授業を６校で実施した。看護・福祉の魅力や地域の医療・福祉を支える人材の必要性を発信した。
	② 本校の特色ある学校行事の取り組みや、衛生看護科・健康福祉科生徒の活躍を地域に向けて発信する。	本校は十分に情報提供をしていると答える割合が、 A　５０％以上 B　４０％以上 C　３０％以上 D　３０％未満	１２月の保護者アンケートの結果、本校は 十分情報を提供している ２５．５％ 情報を提供している ６８．３％ 情報がやや少ない ５．５％ 情報が不十分 ０．７％ 評価　D	「十分情報を提供している」「情報を提供している」の肯定評価を合わせると９３．８％で中間評価の９０．８％より増加した。しかし、「十分情報を提供している」の増加率は０．１％と横ばいである。 目標は達成していないが、「情報が少ない」「不十分」との回答はどちらも減っており、保護者は学校からの情報を十分に受け取っていると思われる。 次年度はさらに生徒の活躍や本校の特色ある取り組みの情報発信に努めたい。

学校関係者評価委員会の評価	地区説明会の参加者減少は少子化の影響もあると思うが、オープンキャンパスなど工夫はしている。ホームページでも十分情報発信はしている。努力を続けてほしい。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	オープンキャンパスは高評価であった。看護・福祉に対する興味や憧れを本校入学に結びつける工夫と努力をしていく。

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度以降の取り組み（改善策など）
4 教職員・生徒のＩＣＴ機器の利活用を進めるとともに、業務の平準化・ワークライフバランス意識の向上により多忙化の解消に努める。	① 時間外勤務を減少させるため、ＩＣＴ活用の定着を図りながら業務の効率化を進める。	具体的な取組を積極的に進め、一月あたりの時間外勤務時間が４５時間未満の教員の割合が、 Ａ　７５％以上 Ｂ　６５％以上 Ｃ　５５％以上 Ｄ　５５％未満　である。	一月あたりの時間外勤務時間が４５時間未満の教員の割合が ７８．１％ 評価　Ａ	ＩＣＴの積極的な活用により業務内容の効率化を推進しており、時間外勤務の減少に取り組んできた。 月ごとに若干バラツキはあるものの、昨年度の７０．３％と比べると数値が増加しており、時間外勤務の減少傾向につながった。しかしながら、時間外勤務時間が６０時間を超える教員が毎月３人程度見られる。ワークライフバランス意識の向上をさらに啓発するとともに、共有ドライブの活用による職員間の連絡や協働作業などを今後も継続していきたい。

学校関係者評価委員会の評価	時間外が１ヶ月４５時間という目標は多いと感じる。工夫が必要。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	目標時間を減らしていく。教員の意識は高まっている。仕事の効率化、平準化を図っていく。